

## 女性の自然化／男性の文化化

— 女性支配と自然支配の根源性と布置連関 —

横山道史

1970年代に社会運動のひとつの形態としてヨーロッパに登場し、「自然を軸とした性の非対称性」を明らかにする学問的営為にエコフェミズムがあるが、これまでのところ、様々なエコフェミニズム理論について「女性支配と自然支配という支配の構造的連関」の解明という観点から領域横断的に把握しようとする試みは行われていないように見受けられる。

本稿では、「女性の自然化／男性の文化化」という関係図式を用いて、「女性支配と自然支配という支配の構造的連関」問題に関する議論をフォローするとともに、その布置連関を整理し、エコフェミニズムを成り立たせている問題構成を体系的に把握するための見取り図を描いてみたい。エコフェミニズムや隣接学問領域において蓄積されてきた「女性支配と自然支配という支配の構造的連関」問題に関する知見を体系化・統合化することは、西洋形而上学を貫通してきた二元論的思考パラダイムの構図を浮き彫りにするとともに、その超克の可能性を模索していくための前提作業として看過できない作業である。

まず、「文化」と「自然」の概念の含意と関係性について述べ、解釈枠組みの定式化を行う。次に、西洋史に基づいて時代区分を行うとともに、その西洋で興ったいくつかの出来事を中心に「自然を軸とした性の非対称性」を分析したエコフェミニズムの知見を用いて、「文化」と「自然」の概念と結びついているキーワードを抽出し図式化を試みる。そして、その図式の説明を通して本稿において独自に導入した仮説モデルの妥当性を示すとともに、エコフェミニズムの論理構成と配置を明らかにする。

キーワード：女性の自然化／男性の文化化、エコロジカル・フェミニズム、女性支配と自然支配の根源性

## 1 本稿の課題

1960年代後半の欧米に始まる第二波フェミニズム運動とエコロジー運動の興隆の中で、いわゆる「エコロジカル・フェミニズム」(以下、「エコフェミニズム」とする)と称される多様な運動諸潮流を登場させている。本稿は、「女性支配の問題と自然支配の問題との構造的連関」の解明という観点から、この諸潮流の位置関係を整理し、その体系的把握を試みようとするものである。

これまでこうした諸潮流は、エコフェミニズムとして日本にも紹介・解説がなされてきた(萩原なつ子, 1997, 2003)。それらは主にキャロリン・マーチャント(Merchant, 1992 = 1994 : 250)による4類型(リベラル・エコフェミニズム, カルチュラル・エコフェミニズム, ソーシャル・エコフェミニズム, ソーシャリスト・エコフェミニズム)に依拠する形での概説が中心とされ、したがってエコフェミニズムの最も基底をなす問題構成である「女性支配と自然支配という支配の構造的連関」問題について究明してきた多様な論者や理論を含むものではなかった。つまり、マーチャントによる4類型は、あくまでフェミニズムにおけるオーソドックスな理論的ポジショニングからの分類ではあるけれども、様々なエコフェミニズム理論について領域横断的に把握する、という観点は必ずしも明確に示されているわけではなかった。従って、本稿の課題は、男性による「女性支配と自然支配という支配の構造的連関」問題について発言する多様な論者や理論をフォローするとともに、その位置関係を整理し、エコフェミニズムを成り立たせている問題構成を体系的に把握するための見取り図を描くことである<sup>(1)</sup>。

エコフェミニズムにおいて蓄積されてきた「女性支配と自然支配という支配の構造的連関」問題に関する知見を体系化・統合化することは、西洋形而上学を貫通してきた二元論的思考パラダイムの構図を浮き彫りにするとともに、その超克の可能性を探究していくための作業の一端として位置づけられる。とりわけ、男性である筆者があえてフェミニズムの領域に参入し発言しようとしているのは、現代社会が直面している環境危機の諸相を乗り越えるためには、「外なる自然」への視点だけでなく、「内なる自然」への視座を有するエコフェミニズムの思想的パラダイムが必要不可欠だと考えているからである。本稿の試みは、女性支配と自然支配をもたらす西洋形而上学の二項対置的思考パラダイムの転換へ向けた可能性を模索するためのささやかな一歩なのである。

## 2 本稿のフレームワーク

男性による女性支配と自然支配の支配連関の構図そのものを造り上げ、正当化し、維持するメカニズムを総合的に把握するために、本稿では、「女性の自然化／男性の文化化」という関係図式を導入する。「女性の自然化／男性の文化化」という構造的モデルの基盤となっている考え方は、クラウディア・V・ヴェールホフ著『自然の男性化／性の人工化』所収の論考「資本主義の中で対立する『自然』と『社会』」(Werlhof, 1991 = 2003 : 221-241)に着想を得たものである。ヴェールホフによれば、資本主義下においては「社会」と対立する概念として「自然」が指定されている、という。「ほぼ15世紀から16世紀以降の地理上の発見と関連づけて、『自然』と『非自然』との関係が対立するものと理解され、それどころかいうならばヒエラルキーと理解され始める。一方が一方に必然的に従属させられる関係、特に自然が非自然の下に置かれる関係である。外的な自然も、内的、すなわち人間も自然もそうみなされる。したがって現在私たちの自然と社会の概念は同時に生じたとしか考えられなく、それらはメダルの表と裏のように一体である」(Werlhof, 1991 = 2003 : 222)。「社会」の概念が優位項、「自然」の概念が劣位項として相互補完的であるとともに隷属関係をも成しているのである。

つまり、「資本主義における社会概念は、すべての人間の組織形態という意味での社会とは無縁である。…社会とみなされるのは、資本にとって儲かる何かすべて」(Werlhof, 1991 = 2003 : 233)を表しているにすぎない。「人間は単に人間であるから社会の一部であるのではなく、彼あるいは彼女が資本——すなわち貨幣、商品一般——と関係することによってのみ、ないしはその程度によって、社会の一部になるのである」(Werlhof, 1991 = 2003 : 234)。

他方、「近代の自然概念はたとえば必ずしも人間と動物を区別するのではなく、なによりも人間と人間を区別するのである。…近代という歴史的時点では、経済プロセスに投入される何かすべてが少なくとも自然として扱われる」(Werlhof, 1991 = 2003 : 223)従って、「いわゆる自然は安価、いや無料である」(Werlhof, 1991 = 2003 : 232)ことが求められているのである。

さらに、ヴェールホフは、以上のように描いた「社会」と「自然」の関係に「性別」を導入して、「社会」と「自然」の関係上における男女の関係を次のように位置づける。男性は、生産者(資本家やプロレタリア)として「社会」を構成する主体／自然を収奪・管理する主体となる。他方、女性は、再生産者として「社会」を構成する主体としては周縁化され、また搾取される客体として「自然へと包摂」される。文脈は異なるが、女性史研究家であるミシェル・ペローも

「この（経済学の）言説においてなによりも特徴的なのは、自然の秩序と社会の秩序とが、性別による分業と男女別の雇用市場のあり方が、混同されていることなのだ。そこでは、女性たちの職業が、一見、かの女たちの『自然の』資質によって定義されているように見える」（Perrot, 1990, 1991, 1992 = 1996 : 23）と、19世紀の女性が置かれた社会的・経済的実在の状況が「自然」という概念との関連において規定されていることを指摘している。

本稿は、以上のような「社会」と「自然」の関係性において、ジェンダーが一つの編成原理として大きな意味を持っていることを析出したヴェールホフの視座に依拠しつつ、さらに筆者は、ヴェールホフの用法を拡張し、歴史貫通的に「女性支配と自然支配という支配の構造的連関」の問題として整理を試みてみたい。筆者のみるところ、この構造的な不平等関係（自然を軸とした性の非対称性）を造り出すメカニズムは共時的にも通時的にも貫徹している。「女性の自然化／男性の文化化」の過程が歴史的に単線的発展を遂げてきたというわけではなく、むしろ様々な矛盾と葛藤が両者の間には存在してきたことは十二分に踏まえた上で、それでもなお、「女性の自然化／男性の文化化」として図式化可能なようなメカニズムが共時的にも通時的にも見出せるのではないかと考えている。

そこで、本稿が提示したい「女性の自然化／男性の文化化」という関係枠組みの外延を、共時的・通時的にも適用可能なように定式化しておきたい。この作業を行うために、エコフェミニズム理論の形成に多大な影響を与えたシェリ・B・オートナーの論考「女性と男性の関係は、自然と文化の関係か？」(Ortner, 1974 = 1987 : 85-117) をとりあげ、オートナーが問題提起した「女性／自然」と「男性／文化」の関係性について検討する<sup>(2)</sup>。

オートナーによれば、「文化とは、思考や技術体系を通じての、人間存在の自然的所与性の超越と定義されるものをさす」(Ortner, 1974 = 1987 : 110)。「自らの自然的実在としての所与性を超越し、その所与性を自らの目的達成のために方向づけ、さらにはそれを自らの利益のために調整する」(Ortner, 1974 = 1987 : 92) ことによって、「人類は自然への支配を表明しようと試みている」(Ortner, 1974 = 1987 : 92)。すなわち、「文化」とは、「外なる自然」への支配・搾取を意味しているだけでなく、「内なる自然」をも支配・搾取の対象として組み込んでいる社会的装置なのである。

オートナーの用法が共時的であるのに対して、ヴェールホフの用法は通時的であるが、結局のところ構図としては酷似している。つまり、オートナーにおける「文化」と「自然」の関係も、ヴェールホフにおける「社会」と「自然」の関係同様に二項対置の関係を成している。また、二元論的対立という意味での差異が強調されており、「文化」「社会」と「自然」との関係において価値があるものと

みなされているのは、すべて差異化する側である<sup>(3)</sup>。

「文化」や「社会」の「自然」に対する「優越性」を創造する行為（言説、表象、観念）——自然を変型させる能力——が「『社会化』」であったり『文化化』であったりする」（Ortner, 1974 = 1987 : 93）ならば、「男性の文化化」とは、男性（性）の社会的文化的な主体としての「優越性」を創造する行為（言説、表象、観念）——自然を変型させる能力——に他ならない。「文化」や「社会」そのものを創造する主体、またはその形成に関与する主体としての男性は、まさにその「社会化（文化化）」によって、「文化」や「社会」の「自然」への優位性・優越性を表明してきた。そして、「自然」（と見なされること）は、「文化」や「社会」への劣位性・従属性を象徴する装置として機能することになったのである。

本稿は、「女性支配と自然支配という支配の構造的連関問題」を探究してきた先行研究に依拠して、女性（性）がこれまで受けてきた差別的な歴史、そこで差異化されてきた文化と、男性（性）に付与されてきた社会の創造主としての役割、すなわち、自然を軸として制度化された性にかかわる価値体系や規範のパターンを「女性の自然化／男性の文化化」という関係図式を用いて体系的に整理し、エコフェミニズムの問題構成の全体的な見取り図を描く試みである。したがって、二元論的な把握を目指そうとするものではなく、むしろ主に西洋文化によって構築されてきた二元論的な特性の布置連関を示す作業として位置づけられるものである。

### 3 男性による女性支配と自然支配の根源性と布置連関

エコフェミニズムにおいては、男性による女性支配と自然支配の「根源性」が何であるかが、極めて重要な位置をもつことになる。「根源性」をどこに見出すかによって、解放戦略にも差異が生じてくるからである。では、エコフェミニストたちは、男性による女性支配と自然支配の「根源性」をどこに見出しているのだろうか。カレン・ウォレン（Warren, 2000 : 21）によれば、「女性支配と自然支配という支配の構造的連関」を究明していく作業には歴史的、概念的、経験的、社会経済的、言語的、象徴・文学的、精神・宗教的、認識論的、政治的、倫理的など様々なアプローチや見解が存在している<sup>(4)</sup>。「女性支配と自然支配という支配の構造的連関」は、多様な形態をもっているがゆえに、多元的な視点を要求するのである。

以下、上記のアプローチによって明らかになってきた女性支配と自然支配の「根源性」に関する知見を援用しながら、「女性の自然化／男性の文化化」の様

相を描きだしていきたい。図1は、それらの関係を整理し素描したものであるが、ここでその際の方法論的立場を明記しておきたい。まず、左端に記載した時間軸であるが、ペロー (Perrot, 1990, 1991, 1992 = 1994, 1995, 1996, 1998, 2000, 2001) らによる一連の女性史研究の成果物である著書『女の歴史』(全5巻)で用いられている西洋史での時代区分に依拠し、古代、中世、近世、近代の4つに区分することとした<sup>(5)</sup>。ただし、本稿における歴史的認識への視座(歴史観)は、エコフェミニズムの思想的パラダイムからの地平に基づいているものであり、従って、西洋史における歴史上・思想上の認識や、歴史研究における通説とは必ずしも合致していないことを断わっておきたい。

右端には、その西洋を中心に興ったいくつかの出来事、とりわけ「女性の自然化／男性の文化化」として観察される事象の契機となったと考えられる要因を8つ挙げた。以下、その8つの内容を中心に検討していく。中心から左側は、女性(性)の意味が「自然」というカテゴリーと結びついていると考えられる、男性による女性(性)への(社会的文化的)言説や表象、観念を明示したものである。一方、右側は、男性による男性(性)への(社会的文化的)意味が「文化」というカテゴリーと結びついていると考えられるものを表したものである。それぞれの概念間、ジェンダー間の関係性は矢印によって示されている。図1は、自然を軸とした性の非対称性が、通時的にも共時的にも貫徹していることを図式的に把握可能なようにすることを目指すものである。

## (1) 古代における「女性の自然化／男性の文化化」

まず、古代において「女性の自然化／男性の文化化」の重要な契機となったと考えられる出来事として、次の4点を取り上げてみたい。1)「性別分業」の誕生、2)「古ヨーロッパ」文化と《聖杯》信仰、3)クルガン文化と《剣》信仰、4)ヘブライ・ギリシア哲学の成立、の4点である。

### 1) 「性別分業」の誕生

「性別分業」の起源、ないしその際の「性別分業形態」を究明することは、この分業が支配と搾取の関係、非対称的で階層的な関係になった理由を探ることである。マリア・ミースは、「性別分業の社会的起源」(Mies, 1986 = 1997 : 65-108) という論考において、この問題の解明に取り組んでいる。

ミースによれば、人間の身体は最初の生産手段であっただけでなく、最初の生産力でもあった。この生産力としての身体の領有において、男女の身体的な差異が「性別分業」の誕生に大きな影響をもたらすこととなる。なぜなら、「女性は、手や頭だけでなく、身体全体が生産的であると経験できる」(Mies, 1986

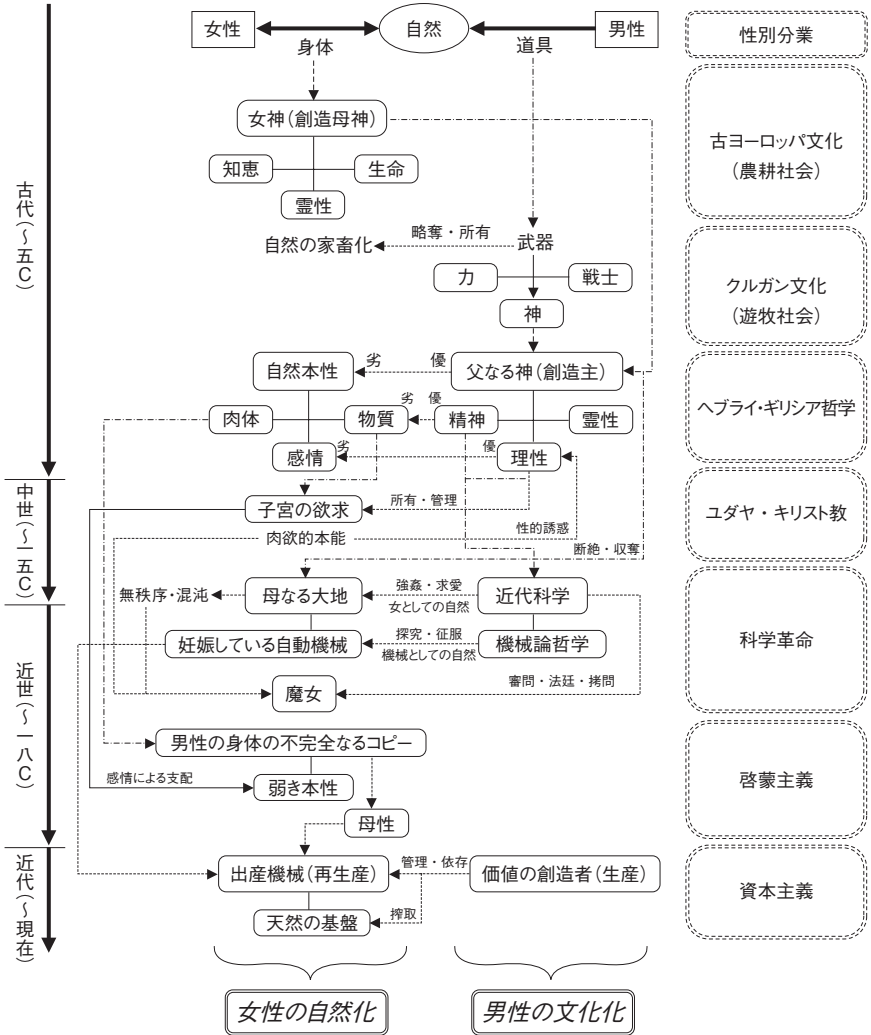


図1 女性の自然化／男性の文化化

(出典：筆者作成)



= 1997 : 80) からである。すなわち、「出産し、母乳を生産する力」である「身体其自然」を領有したのに対して、「男性は、女性ができるのとはまったく同じようには、自らの身体を生産的なものとしては経験できない」(Mies, 1986 = 1997 : 84) し、「男性の身体的な生産力は、女性の生産力とは違って、外的手段、つまり道具の介在なしには発現しえない」(Mies, 1986 = 1997 : 84)。

女性は、子どもだけでなく、その子どものために最初の食物を収集しかつ育てたために、「女性と自然との関係は、生産的な関係であっただけでなく、はじめから社会的生産でもあった」(Mies, 1986 = 1997 : 83)。女性たちが歴史的に発展させていった労働過程、すなわち自然の対象化とその領有関係は、「他者」を育むための相互互惠的な関係を成していたのである<sup>(6)</sup>。

これに対して、男性は、道具を介してのみ生産力が発揮されるために、当然、道具の発明や技術の洗練に関心が寄せられることになった。しかも、重要な点は、その道具や技術は狩猟だけでなく、人さえも殺めることが可能であったことである。それが結果として、男性による道具を介した自然との関係を、生産的というよりは、略奪的・暴力的なものとした。同時に、生産力を備えた女性も自然同様に略奪・搾取の対象となっていったのである。こうした男女による自然の領有様式の差異が、『『人間的な労働』(生産的)と『自然の活動』(非生産的)との分業』(Mies, 1986 = 1997 : 68)を生み出したのである。

同様の指摘は、オートナーの論考の中にも散見することができる。「男性は生まれつき出産の機能を欠いているため、技術や象徴という媒介を通じて自らの創造性を外的に『人為的なもの』としなければならない。その結果、男性は比較的耐久性があり、不滅であり、超越的な対象を創造するのに対して、女性は滅びゆくもの、つまり人間を生み出すだけである」(Ortner, 1974 = 1987 : 97)。「狩猟や戦争行為が認められ価値があるとされるのはその殺戮行為のなかにあるのではなく、出産過程の自然さに比べて狩猟や戦争に備わる超越的(社会的・文化的)本性のなかにあるのだ」(Ortner, 1974 = 1987 : 97)と。

## 2) 「古ヨーロッパ」文化と《聖杯》信仰

しかしながら、この性別分業による支配様式の確立は、狩猟・採集社会や農耕社会では完全に開花することはなかった。「古ヨーロッパ」の平和な母系制社会の存在と、これにかわって紀元前4500～4000年頃におこった家父長型社会の構造変動について論じたりアン・アイスラーによれば、「古ヨーロッパ」文化の特徴は、「主として結びつきの原理に基づいている」(Eisler, 1987 = 1991 : 8)「協調形態社会」(Eisler, 1987 = 1991 : viii)であり、「女性的な《聖杯》、すなわち生命の源泉によって象徴される、生み育て創造する自然の力が一破壊する力で



はなく—最高の価値を与えられていた」(Eisler, 1987 = 1991 : 88)。また、「女性に対する男性の優越、『女性的』価値に対する『男性的』価値の優越を生むこともなかった。反対に、支配的なイデオロギーは女性中心であって、神は女性の形で表現されていた」(Eisler, 1987 = 1991 : 88)。偉大な母であり、あらゆるものに生命を与え維持する自然と霊性の女神を崇拜し、戦争を好まず、また女性が男性に従属している社会でもなかったのである。女神と結びつけて考えられたのは、霊性や生命だけではない。知恵や知性といった観念も女神と関連づけられていた。女神信仰が「古ヨーロッパ」の社会的文化的秩序を体系づけていたのである<sup>(7)</sup>。

### 3) 「クルガン」文化と《剣》信仰

「古ヨーロッパ」において、女神を崇拜していたいわゆる「協調形態社会」が物理的にも文化的にも崩壊しはじめたのは、キリスト教紀元前50世紀頃で、「クルガン侵入波第一波」と名づけられるものである<sup>(8)</sup>。「クルガン」文化とは、「古ヨーロッパ」文化が「協調形態社会」として特徴づけられるとするならば、それとは反対に「男性支配、男性暴力、総じて支配階層の権威主義的な社会構造が規範であった社会組織」(Eisler, 1987 = 1991 : 91)であり「支配者形態社会」(Eisler, 1987 = 1991 : viii)として特徴づけられる社会であった。「強力な司祭と戦士に支配されて、彼らは戦争と山獄の男性神をたずさえ」(Eisler, 1987 = 1991 : 90), 「『男性的な』《剣》によって象徴される力」(Eisler, 1987 = 1991 : 96)を信仰していた。「武器は明らかに神の機能と力を表現していた」(Eisler, 1987 = 1991 : 98)のである。

「古ヨーロッパ」文化と「クルガン」文化の違いを生み出した最大の原因は、前者が農耕社会であり後者が遊牧社会であったことに起因していると考えられる。なぜなら、遊牧民による動物の家畜化こそが自然の家畜化や再生産機能の操作へと至る契機となったのであり、従って、男性と自然との関係も決定的に変化せざるを得なくなったのである。遊牧民の女性も、食料の生産者ないし採集者としての必要性が低下し、息子の養育者、繁殖者としてのみに限定されてしまった。

すなわち、「農耕に基礎をおく経済と、家畜の飼育に基礎をおく経済とは、二つの対照的なイデオロギーを生み出した。古ヨーロッパの信仰体系は、生誕・死・再生という、女性原理、《創造母神》のなかに具現された農耕の循環を核にしていた。クルガンのイデオロギーは、比較インド＝ヨーロッパ神話学からも知られるように、男性的で英雄的な戦士としての神、青天の霹靂のように襲う神を称賛した。武器は〈古ヨーロッパ〉の形象のなかにはない。それに対して、短剣

や戦闘用斧は、歴史的に知られているすべてのインド=ヨーロッパ人と同じく、鋭利な剣の致命的力を礼賛していたクルガン人たちの支配的な象徴であった」(Eisler, 1987 = 1991 : 97) ののである。こうして、遊牧社会は、家畜と女性を飼いならすことを習得し、農耕社会に取って代わったのである。

#### 4) ヘブライ・ギリシア哲学

同様の侵略者に、カナンの地を侵略したヘブライ人がいる。アイスラーによれば、「彼らもまた戦争と山嶽の獰猛な怒りの神（エホバないしヤハウエ）をもちこんできた。そして、次第に、聖書にみられるごとく、彼らもまた征服した土地の人々のうえに自分たちのイデオロギーと生き方を押しつけたのである」(Eisler, 1987 = 1991 : 91)。

メアリ・デイリーに始まるフェミニスト視点からの宗教領域への批判的問題提起から、女神崇拜において女性と結びついていた重要な象徴の数々が、神=父と掲げる父権一神教によって貶められてきたことが明らかになってきている。「高級な秩序に對置されるどころの、低級な自然と女性との相関関係は、バビロニアからヘブライ、ギリシアの思想へと目を転じると、劇的に変化する。バビロニアとカナンの神話では、混沌、あるいは、原始の物質の脅威と死に対する生命の復活の力の両方が、女性の力（ティアマト、イシュタル=アナト）によって象徴される」(Ruether, 1983 = 1996 : 116) ものであったが、「ヘブライの思想においては、神は彼の『創る』創造物より上にあげられる。…神は混沌に超越して存在するもので、上からそれを形成する、男性の精液的、文化的権力（言葉の業）として象徴化される」(Ruether, 1983 = 1996 : 116-117) ののである。

さらに、「ギリシア思想の中では、男性の意識と人間以外の自然との間の二元論と疎外関係がさらに激化する。ヘブライの思想と異なり、ギリシア哲学では、人間の意識が自然から切り離され、神と同じ超越的地位に上げられる。人間の意識は、存在の起源、永遠の領域である男性の霊という超越的領域に関係する。そして、目に見える世界と肉体的存在は、意識の下にある劣った領域で、意識によってコントロールされるものとして客観化されるのである。原始的物質は、男性の思考に従って形成されることに抵抗する手に負えない『代物』とみなされる。精神はこの低級な物質を征服し、秩序づける努力を払わなければならない」(Ruether, 1983 = 1996 : 119)。つまり、女性は物質、肉体の低級な領域のアナロジーとして象徴化され、超越的精神によって支配されるべきものとされたのである。

また、女性という特性を定義するうえで、古代ギリシア人たちの確信であり一致した同意事項はおおよそ次のようなものであった。「女性はその質において劣

悪であり、適合性に欠け、高い能力もない——つまり女性には、なんらかの不備、欠落、不完全さがあるとみなす——」(Sissa, 1990, 1991, 1992 = 2001 : 129) という考え方である。この女性の本性が生まれつきの欠陥であるという考え方は、男性の身体とのアナロジーから派生している。「能動的で、創造主である父親は、自分の姿に合わせて子どもをつくる。父親に対して、母親の身体は、ひとつの場、一種の仕事場のようなもので、生命力のない実体である」(Sissa, 1990, 1991, 1992 = 2001 : 161)。この徹底した男女の関係——優劣の関係——に関する思考方式は、古代以後も女性を特徴づける認識枠組みとして重要な意味をもつことになる。

## (2) 中世における「女性 の 自然化 / 男性 の 文化化」

中世においては、ヘブライ・ギリシア哲学の影響を受けて確立されたユダヤ・キリスト教の中に、「女性 の 自然化 / 男性 の 文化化」を促進するようないくつかの重要な契機を見出すことができる。

### 1) ユダヤ・キリスト教

アリストテレス (前384-322 : 哲学者) の思想に代表される古代ギリシア哲学における、固定化された「自然本性」と、女性は生殖において二次的な役割しか果たさない、という考え方は聖トマス・アクイナス (1225-1274 : 神学者、哲学者) によって受け継がれた。「聖書の一般に信じられている解釈に根ざしている、女性は特別に罪の深いものだ」という考えは、アリストテレス哲学によって確認された女性の劣等な『自然本性』という思想と結合して、女性の従属という社会的事実をあたかも天に刻印されているもののように見せかけたのだった」(Daly, 1968 = 1981 : 22)。

翻って、西欧神学・宗教における人間と自然との関係について考えみると、そこには次のような特徴が浮かび上がる。今日の環境危機の元凶をキリスト教の人間論に求め、創世記の創造物語を分析したりン=ホワイトによれば、「人間の身体は粘土から作られたけれども、人間は単なる自然の一部ではない。人間は神の像を象って作られているのである」(White, 1968 = 1972 : 87)。「神の像」とは、人間を自然一般から超越した存在と捉え、かつ自然を支配することを是認する特権的シンボルとして理解されるものである。したがって、「キリスト教の、とくにその西方的な形式は、世界がこれまで知っているなかでもっとも人間中心的な宗教である。…キリスト教は古代の異教やアジアの宗教とまったく正反対に、人と自然の二元論をうちたてただけではなく、人が自分のために自然を搾取することが神の意志であると主張したのであった」(White, 1968 = 1972 : 87-88)。宗

教における人間と自然の二元論は、神の超越性に対応しており、神が自然を超越的に支配できるように、人間が自然を支配できる根拠として「神の像」が持ち出されてきたのである<sup>(9)</sup>。

この人間と自然の二元論をより踏み込んで分析したのが、ローズマリー・R・リューサーである。彼女は、キリスト教の伝統的象徴体系の中で、男性が霊性、不死、抽象という高次元を代表し、女性が肉体、自然、死、具体という忌むべき低次元を代表するという二元論の構造を暴露し批判した。「女性より男性をより『神に似せる』ことは、偶像崇拜的であり」(Ruether, 1983 = 1996 : 48), したがって、神の代弁者として男性を偶像化する原理としての「神の像」こそが人間による自然の支配および男性による女性の支配を正当化する役割を担ってきたと見なすことができる。人間の自然支配の正当性のシンボルとしての「神の像」は、男性の女性支配をも正当化する機能を備えていた。「神 = 父」や「神の像」は、男性的・自然搾取なイメージを具現化したものなのである。

### (3) 近世における「女性の自然化／男性の文化化」

神とは生命や自然を超越的に支配し、操作する創造力を備えた神であり、その力のイメージが「神 = 父」や「神の像」として司祭や科学者などに投映されていくのが、近世である。近世において「女性の自然化／男性の文化化」の重要な契機として、1)「科学革命」の勃興と、2)「啓蒙主義」の隆盛、の2点を挙げて検討してみたい。

#### 1) 「科学革命」の勃興

自然と女性の両方に対する支配を是認した世界観と近代科学の形成過程について分析した先駆的研究として最もよく知られているのはキャロリン・マーチャントによる『自然の死』(1980 = 1985)である。近代科学は、自然を探求するにあたって様々なメタファーを自然に付与してきた。その中でも、自然を女性とみなしその支配と征服に性的なイメージを付与した「女としての自然」観と、有機論的自然観に対する「機械としての自然」観という機械論的哲学が決定的な意味をもつこととなった。

「女としての自然」のイメージの形成に大きく寄与したのが、近代科学の父と称せられ自然哲学者であるフランシス・ベーコン (1561-1626) である。マーチャントは、ベーコンが推進しようとする新哲学 (実験哲学) の目標とするところが、性的隠喩をもって語られていることを明らかにした。『『男の技巧と手』を使えば、彼女を『本来の状態からひきずりだし、絞りあげ、型に流しこむ』ことができる。『彼女の最も奥まったところにあるものを実験によって無理やり白

状させる』。こうして『人知と人力は、ひとつのものとして交わるのである』(Merchant, 1980 = 1985 : 322-323)。実験室内に自然を拘束し、手や精神によって解剖し、隠された秘密を暴き出すという近代的な実験方法が、大胆な性的イメージとして描かれたのである。

「機械としての自然」という有機体説に代わる新しいメタファーの形成に大きな影響を与えたのが、ベーコンの秘書でもあり友人であった政治理論家のトーマス・ホブズ (1588-1679) であった。ホブズはその著書『リヴァイアサン』(1651)において、社会的無秩序に対する解決策としての、機械論的な社会モデルを作り上げることに成功した (Merchant, 1980 = 1985 : 389)。

西洋において、地球を慈母とみなす考えたと、自然を無秩序とみる二つの自然観が同居していたが、科学革命が進行し経済活動が拡大していく中で、社会は後者のイメージを必要とした。自然を無秩序とみる第二のイメージは、力によって自然を制するという現代の重要な考え方を導き出した。機械論および自然に対する支配と管理の考え方が中心概念に取って代わったのである。

マーチャントの仕事とほぼ同時期に出版されたブライアン・イズリーの『魔女狩り対新哲学』(1980 = 1986) と『科学と性的抑圧』(1981) も、女性 = 自然というメタファーがどのように構築されてきたかを知るうえで、重要な著作である。イズリーは、マーチャントと同様に、科学に付与された性的イメージを明らかにすると同時に、近代科学と魔女裁判が共犯関係であったことを暴いて見せた。男性科学者による徹底した自然の探究と征服欲望は、男性による女性の征服と重ね合わされたが、その際、魔女は自然の暴力を象徴する存在と見なされた。不穏な女は、混沌とした自然と同じように、おさえつけておかねばならなかったのである。ルネサンスの宮廷の男たちが貴婦人を崇拜する傍らで、宗教裁判官が女を火あぶりの刑に処したのはこのためであった。自然を拷問にかけて秘密を暴く具体的な実験台が、魔女裁判とその審問であったのである。

実験哲学とは、まさに「男性的な哲学」「男性の精神を堅固な真理の知識によって高貴にするような哲学」(Easlea, 1980 = 1986 : 323) であった。そして、「機械論哲学は男性の想像力を格上げした。父なる神は全く女性の助けを借りずに宇宙とそこに住むすべての生物をいっぺんに創造したのだ。女性のその後の役割は、その性にふさわしく、父なる神が彼女の体内に植えつけた成長しつつある胎児に栄養を与えるだけであった。西欧のブルジョア男性は、父なる神に似せて作られ、『母なる大地』と縁を切ることを選んだのだから、彼には物質世界——神の『偉大な自動機械』(ボイルは「妊娠している自動機械」と呼んだ)——を機械的に無性的に収奪することしか残されていなかった」のである (Easlea, 1980 = 1986 : 367)。

近代科学には男性性を、自然には女性性を、というジェンダーが濃厚に貼り付けられてきたことが、マーチャントとイーズリーによる一連の研究から明らかである。ベーコンの自然探究の姿勢に明らかなように、自然を探究するという営為には性的な含意を伴っていた。「女としての自然」を、男性のセクシュアリティの対象として組み込み征服することこそが科学的研究とみなされたのである(『ロンドン王立協会の歴史』(1667)を著したトマス・スプラットは「自然への求愛」、ベーコンは「自然への強姦」という比喩を用いた)。そこには女性と男性、心と物、主観と客観、理性と情緒という二極分化があり、自然、女性、非西欧を支配する男性と科学の結合があったのである。しかし、両者から多大な影響を受けたエヴリン・F・ケラーは、ベーコンらの論じる科学が男性性だけで説明できるわけではなく、その背後には「両性具有的とさえいえる『精神と自然との結婚』という隠れた想定と承認が横たわっている」(Keller, 1985 = 1993 : 68)と、ベーコンのメタファーの二面的性質を指摘している。

以上のような欧米のフェミニズム的科学批判の理解と一致して、ヴァンダナ・シヴァは、近代科学が開発至上主義の認知的基礎であり、西洋の白人男性的思考の産物であると論じている。彼女のみるところ、グローバルな市場経済の利益に貢献している「還元主義的科学」がエコロジ的危機の根本原因であって、その例証としてグローバル市場向けの科学的林業について挙げている。近代科学と家父長制は自然と女性への優位性という点で結託し、科学と性のイデオロギーが互いに強化し合うことになった。「家父長制の企てとしての近代科学」という見方、すなわち「近代科学が、近代西欧の男性による社会政治的企みであったという見方は、母なる地球、女性など自然の範疇に囲い込まれ受動的で無力とされたものからの応答として出てきた」(Shiva, 1988 = 1994 : 37)のであり、前者が後者を服従させるという概念的な戦略をつくりあげたのである。

## 2) 啓蒙主義の隆盛

「啓蒙主義の関心ごとのひとつは、一方で女性のもつ違いを想定し、程度の差こそあれ、この違いに劣等生の烙印を押しながら、これを自然権を根拠とする平等の原理と両立させようとするところにある。したがって大事なことは、女性に社会的な役割、たとえば妻、母親などなどの役割を認めることである。すべての啓蒙主義の思想家が強調することは、こうした役割には、女性にとっての必然性があるということである。女性がなんらかのかたちで市民となることができるのは、自然が望んだ役割によってである。政治的な地位は、正面からけっして女性には認められなかった」(Casnabet, 1990, 1991, 1992 = 1995 : 518)。さらに、「啓蒙主義の哲学者たちの大部分にとって、女性には理性が欠けているということ、



あるいは下等な理性しかもっていないということは、安全確実な明証性をもっているうえに、さらにこの明証性が、いくつかの事実にもとづいているとまでされている。…この無能力は『自然』心理学に根ざしている。女性は情念と想像力に支配される存在であって、概念を操作する存在ではない」(Casnabet, 1990, 1991, 1992 = 1995 : 490) と見なされていた。すなわち、女性の性的および知的な劣等生、さらに種の再生産や子育てにおける役割は、まさに当然のこととして自然に基づく役割だと考えられていたのである。

こうした啓蒙主義における女性観と、医学の言説は共犯関係にあった。「まず女性の身体を機能不全体、すなわち『男性の身体の不完全なるコピー』として記述し、つぎにこれが、弱き本性という記述につながる。女性は、子宮の動揺に支配されているというのである」(Farge, Davis, 1990, 1991, 1992 = 1995 : 382)。女性の身体的特徴から、予め定められた運命へ導く医学者の論法は、徹底している。女性は、「自然の使命として母性をもっており、規則正しく、ひとつとところにとどまって生活しなければならない」(Salvadore, 1990, 1991, 1992 = 1995 : 579)。こうした、「医学の思考は、自然決定論の名のもとに、社会秩序によって割りあてられた狭い領域のなかに、理想の女性像を閉じ込める」ことに成功した。「女性は、健康で幸福であれば、一家の母であり、永遠の徳と価値を守るものなのである」(Salvadore, 1990, 1991, 1992 = 1995 : 579)。啓蒙主義の哲学者や医学者たちは、女性存在を母性との関係において意味づけ再生産者としての役割を強調することによって、女性を家庭の中に囲い込もうとする観念戦略を捏造することに成功したのである。

#### (4) 近代における「女性 の 自然化 / 男性 の 文化化」

家父長制的性別分業の形態は、歴史上における搾取関係のパラダイムとなり、特に資本主義の下でもっとも顕著な形でその略奪の様式を表わした。すなわち、現在広く知られているように、女性を主婦、男性を稼ぎ手とするイデオロギーを基盤とした性別分業がそれである。この様式を確立していくなかで前提となったのが、魔女狩りという女性の身体に対する自律的管理の略奪と、植民地における土地およびサブシステム生産に対する自律的關係を搾取する、という二つの過程であった。この後に、はじめて白人男性の賃金労働者は、形式的に自由なプロレタリアの地位に上昇した。まさに、「資本の蓄積は、直接に、女性の生産力のおかげにうちたてられてきた」(Werlhof, 1988, 1991 = 1995 : 65) ののである。

##### 1) 資本主義の台頭

資本主義における男女の二極化、つまり分業によるヒエラルキー化と構造的な



平等関係を問題にしたのが、ヴェールホフである。資本主義的生産様式に基づく近代社会は、「プロレタリア」としての賃金労働者と、生産手段の所有者である「資本家」の二つの社会階級によって成立するものと考えられ、その前提として植民地化などの「本源的蓄積過程」が存在するとみなされてきた。しかしながら、この過程から死角化されてきたのが、「女性生産者の近代的主婦への転化」といういわゆる「主婦化」の過程である。この主婦の創出という過程が、現在もまさに「継続的」に行われ、それが資本蓄積の土台となっている。すなわち、このような「継続的本源的蓄積過程」に組み込まれた存在の典型が主婦としての女性なのであり、資本制の階級構成が、従来のマルクスが指摘するように、資本家と労働者という二層から成り立っているのではなく、資本家と生産労働者、および再生産労働者（主婦と植民地のサブシステム生産者、ならびに無賃労働者）という三層で成り立っていることを析出したのである。

女性の「主婦化」と並行して行われたのが、「価値の創造者」(Scott, 1990, 1991, 1992 = 1996 : 656)としての男性の「労働戦士化」である。ここでは、女性は準「生産手段」として男性の管理下に置かれた。なぜなら、「女性は出産能力についての『自然的独占権』を持つゆえに、必然的に新しい社会にとってきわめて危険なものに映り、その結果ついには家に閉じこめられてしまったのである」(Werlhof, 1988, 1991 = 1995 : 72)。すなわち、女性の出産力を必須の要件とする資本主義は、女性を単なる「出産機械」(Werlhof, 1991 = 2004 : 113)へと転化し、かつ育児労働へと縛り付けることで、女性を「孤立化・アトム化」してきたのである。

「直接自然に依存する生産者としての女性」(Werlhof, 1988, 1991 = 1995 : 62)というものが、まさに「本源的蓄積過程」において「自然の領域」として社会によって持続的に創出され・搾取されていくのである。自然は社会的過程において必要不可欠な物質的土台だからであり、したがって、誰かが常に社会的に「自然化」されなければならない。「自然化」は資本主義的生産様式の不可分の一部なのであり、男性が女性と自然の「指揮者」として「社会化」される一方で、女性は「天然資源」としてまさに「自然化」させられるのである。

#### (5) 「女性の自然化／男性の文化化」をもたらす思考様式

「女性の自然化／男性の文化化」として観察される男女の差異化のメカニズムを、それを成り立たせる概念それ自体に踏み込んで分析したのが、ウォレンやバム・プラムウッドらである。ウォレンによれば、概念的な支配連関は、エコフェミニスト哲学の中心課題である<sup>(10)</sup>。ウォレンは、女性の社会的編成は独自の「概念的枠組み」をもっていると想定し、その解明・解体作業には「概念的分

析」が必要であると論じている。特に、女性支配と自然支配という支配連関は、「抑圧的・家父長制的概念枠組み」という「西洋的概念枠組み」によって構成されているとみる。この「抑圧的・家父長制的概念枠組み」は、独自の論理構成を成しており、その基軸となっているが、「支配の論理」を中心とする、「ヒエラルキー的な価値思考」(Warren, 1987: 6)である。この場合、「二元論」一般ではなく、つまり、あらゆる二元論を問題にしているのではなく、そこに「ヒエラルキー的な価値思考」が滑り込むことで、二元論が水平的な関係から垂直的な関係へと転化し、支配の論理へとつながっていくことを問題としているのである。すなわち、女性支配と自然支配の概念的な結節の根拠を、その結節自体を背後で支える「概念」自体に見出しているのである。

「ヒエラルキー的な二元論」の具体例として、プラムウッドは、文化／自然、理性／自然、男性／自然、精神／身体、理性／情動、人間／自然、公的／私的、自己／他者、など(Plumwood, 1993: 43)を挙げ、一方ウォレンは、男性／女性、文化／自然、精神／身体、をその具体例とみなしている(Warren, 1987: 6)。もちろん、これらの二項対置は、前者が優位項、後者が劣位項という位置づけになっているが、プラムウッドによれば、それを支えているのは「ヘゲモニー的な中心主義」である。この「ヘゲモニー的な中心主義」とは、具体的には、「人間中心主義」、「自民族中心主義」、「ヨーロッパ中心主義」、「男性中心主義」を総称しており、次のような特徴を備えている。「ヘゲモニー的な中心主義とは、主——従の帰属パタンのことである。つまり、一つの用語を主たるものないし中心として設定し、辺縁化された他者を、たとえば、中心との関係で不完全なものとして、その用語との関係で副次的なもの、あるいは派生的なものとして定義するのである」(Plumwood, 2002: 101)。すなわち、女性と自然がともに劣位項として定位されているのは、まさにこの「ヘゲモニー的な中心主義」的思考様式による産物と言えるのである。

#### 4 まとめ

本稿は、男性による女性支配と自然支配の根源性の多様性を整理しその布置連関を図式化することを試みてきた。それは、西欧社会における自然を軸とした性の非対称性の歴史的文化的過程を把握する試みでもあった。女性を自然の領域へと包摂しようとする動力が働く一方で、男性を女性の管理者や社会の統治者として創出しようとする意図や仕掛けも絶えず存在していた。時代の権力者や支配者によって造り出される、自然を軸とした性の非対称性は、単なる言説や表象、観念にとどまらず、男性による女性支配と自然支配を正当化するメカニズムとして

機能していたのである。本稿では、そうした一連のプロセスを「女性の自然化／男性の文化化」として総合的に捉えることを試みてきたのである。

「女性の自然化／男性の文化化」という関係図式から導き出したいのは、マイナスに記号化され貶められた自然としての女性の価値の復権を主張することではない。また逆に女性と自然のかかわりの断絶の方向性を提示しようとするものでもない。女性の自然との結びつきの強化をもって女性解放を志向する方向性は、日本においても既に「女性原理主義」として「エコ・フェミ論争」で論じられてきた課題である。逆に、かつてラディカル・フェミニズムが志向した断絶の方向性は、男性が目指している自然の制約からの解放（自然への非依存）を意味しているのであって、本稿の文脈で言えば、女性と自然のかかわりの断絶とは「女性の文化化」へのベクトルを指していることになる。

すなわち、「女性と自然のかかわりを強化する方向」も「女性と自然のかかわりの断絶を求める方向」も、西洋形而上学における二元論（啓蒙主義的認識論）の陥穽にはまっている、という点で女性解放とはなりえないだろう。この点に関しては、イネストラ・キングの次の主張に共鳴を得ている。上述した二つのベクトルではなく「エコフェミニズムは三番目の方向を指し示す。この三番目のフェミニズムの立場は、自然と文化の対立が文化の産物であるにもかかわらず、以下のことを認めている。すなわち、女性たちは男性文化に参画することで女性と自然のかかわりを断ち切らぬよう、意識的に選択しようと理解している。むしろ逆に女性の立場を有利なものとして、知識の直観的で霊的な形態や合理的な形態、それらを統合しうるまったく異なった文化と政治を創造するために使うことができよう。そこでは、自然と文化の区分け自体を変えさせ、自由でエコロジカルな社会を想定し、それを創造させようことを前提に、科学と魔法の両者がともに受け入れられることになる」(King, 1983 = 1989 : 70)。従って、次なる課題が、「自然」と「社会」ないしは、「自然」と「文化」という二項対置的思考枠組みを超える反二元論的なパラダイムの構築であることは、論を俟たない。

(よこやま みちふみ 横浜国立大学大学院環境情報学府)

## 〔注〕

- (1) 本稿の問題意識は、エコフェミニズムの視座上に位置づけられるものであるが、一般的にエコフェミニストとみなされている／もしくは自称している論者に拘らず引用している。
- (2) 「女性／自然」「男性／文化」という図式は、「オートナー・パラダイム」として知られている。
- (3) 文化化を、特定の文化の中での社会化過程とし、社会化を、人間社会に共通する社会的要請の学習過程とする。
- (4) ウォレン自身が、概念的、倫理的、政治的な視角から「支配連関」について究明しようとしている姿勢に明らかなように、一元的な観点からの把握というよりは、複数の視角からそれぞれの論者の問題意識や関心によって組み合わせが存在している。
- (5) ペローらによる時代区分は、古代、中世、16～18世紀、19世紀、20世紀の5つである。本稿ではそれを参考にしつつも、図式化ならびに分析の都合上の問題から16～18世紀を近世、19世紀と20世紀を近代としてまとめて用いることとした。
- (6) その意味で、子どもを産み育てる女性の活動は、単なる生理的機能や動物の繁殖力ではなく、労働として理解することが重要である。
- (7) このような社会が今我々が希求するような平和な社会に近いとしても、それを理想化し、世俗の科学的時代にだけ原因を求めないことが重要である。
- (8) キリスト教紀元前4300-4200年の第一波、同約3400-3200年の第二波、そして同約3000-2800年の第三波がある。
- (9) そして、超越的な唯一神論は、自然界に存在すると信じられていた種々の霊性の放逐にも結びついていったという。
- (10) エコフェミニスト哲学とは、エコフェミニストにおける哲学という理論実践であり、エコフェミニズムの哲学理論の構築ではない。

## 〔引用・参考文献〕

- Agarwal, Bina 1992 "The Gender and the Environment Debate: Lessons from India," *Feminist Studies* 18, no. 1, pp.119-58.
- アガルワル・ビナ 1999 池田真理訳「ジェンダーと環境保護運動」『現代思想』青土社, pp.250-277
- 青木やよひ編 1983 『フェミニズムの宇宙』新評論
- 青木やよひ 1985 「フェミニズムの未来」『現代思想』, 4月号, pp.212-227
- 青木やよひ 1986 (1994 = 増補新版) 『フェミニズムとエコロジー』新評論
- 淡路剛久・川本隆史・植田和弘・長谷川公一編 2005 『生活と運動』リーディングス環境, 第3巻, 有斐閣
- Braidotti, Rosi / Ewa, Charliwicz / Sabine, Havscher / Saskia, Wieringa 1994 *Women, the Environment and Sustainable Development: Toward a Theoretical Synthesis*, Atlantic Highlands, N. J.: Zed Books. (=1999 壽福眞美監訳『グローバル・フェミニズムー女性・環境・持続可能な開発』青木書店)
- Daly, Mary 1968 *The Church and the Second Sex*, Beacon Press. (=1981 岩田澄江訳『教会と第二の性』未来社)
- Daly, Mary 1973 *Beyond God the Father: Toward a Philosophy of Women's Liberation*, Beacon Press.
- Duby, Georges / Perrot, Michelle (ed.) 1990, 1991, 1992 *Histoire des Femmes*, Gius. Laterza & Figli Spa, Roma - Bari. (=1994, 1995, 1996, 1998, 2000, 2001 杉村和子・志賀亮一監訳『女の歴史』藤原書店)
- なお、本文中の引用 Sissa, Casnabet, Farge, Davis, Salvatore, Scott は、この『女の歴史』全5巻に収録されている論文である。

- Easley, Brian 1980 *Witch Hunting, Magic and the New Philosophy: An introduction to debates of the scientific revolution 1450-1750*, Sussex: Harvester Press. (=1986 市場泰男訳『魔女狩り対新哲学—自然—と女性像の転換をめぐる』平凡社)
- Easley, Brian 1981 *Science and Sexual Oppression: Patriarchy's Confrontation with Woman and Nature*, London: Weidenfeld and Nicolson.
- 江原由美子 1990 『フェミニズム論争70年代から90年代へ』勁草書房
- Eisler, Riane 1987 *The Chalice and The Blade: Our History, Our Future*, San Francisco: Harper & Row. (=1991 野島秀勝訳『聖杯と剣—われらの歴史, われらの未来』法政大学出版社)
- 古田暁美 2005 「サブシステムと市場経済—エコフェミニズムの挑戦」越智貢他編『応用倫理学講義4 経済』岩波書店, pp.188-207
- Gaard, Greta 1998 *Ecological Politics: Ecofeminists and the Greens*, Philadelphia: Temple University Press.
- 萩原なつ子 1997 「エコロジカル・フェミニズム」江原由美子・金井淑子編『フェミニズム』新曜社
- 萩原なつ子 2001 「ジェンダーの視点で捉える環境問題—エコフェミニズムの立場から」長谷川公一編『講座 環境社会学—環境運動の政策とダイナミズム』, 第4巻, 有斐閣, pp.35-64
- 萩原なつ子 2003 「エコフェミニズム」奥田暁子・秋山洋子・支倉寿子編『概説フェミニズム思想史』ミネルヴァ書房, pp.271-283
- 河上睦子 2003a 「環境倫理思想としてのエコフェミニズム」『季報唯物論研究』, 85号, pp.60-70
- 河上睦子 2003b 「〈女性・身体・自然〉への現代的視覚」『社会思想史研究』, 27巻, pp.65-80
- Keller, Evelyn Fox 1985 *Reflections on Gender and Science*, Yale University Press. (=1993 幾島幸子・川嶋慶子訳『ジェンダーと科学—プラトン, パーコンからマクリントックへ』工作舎)
- King, Yenestra 1983 「『エコ・フェミニズム』と『フェミニストのエコロジー』に向けて」(=1989 ジョアン ロスチャイルド編 綿貫礼子ほか訳『女性vsテクノロジー』新評論 pp.63-78)
- 近藤和子・他 1998 「座談会 エコフェミニズムを習う」『現代思想』, 1月号, 青土社, pp.238-253
- 丸山正次 2006 『環境政治理論』風行社
- Mellor, Mary 1992 *Breaking the Boundaries: Towards a Feminist Green Socialism*, London: Virago. (=1993 壽福眞美・後藤浩子訳『境界線を破る!—エコ・フェミ社会主義に向かって』新評論)
- Mellor, Mary 1997 *Feminism and Ecology*, New York: New York U.P.
- Merchant, Carolyn 1980 *The Death of Nature: Women, Ecology, and the Scientific Revolution*, New York: Harper & Row. (=1985 団まりな他訳『自然の死—科学革命と女・エコロジー』工作舎)
- Merchant, Carolyn 1992 *Radical Ecology: The Search for a Livable World*, London: Routledge. (=1994 川本隆史他訳『ラディカルエコロジー—住みよい世界を求めて』産業図書)
- Merchant, Carolyn 1995 *Earthcare: Women and the Environment*, New York: Routledge.
- Mies, Maria / Shiva, Vandana 1993 *Ecofeminism*, Zed Books.
- Mies, Maria 1986 *Patriarchy and Accumulation on a World Scale*, Zed Books. (=1997 奥田暁子訳『国際分業と女性—進行する主婦化』日本経済評論社)
- Mies, Maria / Werlhof, Claudia von / Benholdt- Thomsen, Veronika 1988, 1991, *Women: The Last Colony*, London: Zed Books. (=1997 古田暁美・善本裕子訳『世界システムと女性』藤原書店)
- 小川真里子 2001 『フェミニズムと科学/技術』岩波書店

- 大越愛子 1996a 『闘争するフェミニズムへ』 未来社
- 大越愛子 1996b 『フェミニズム入門』 ちくま新書
- Ortner, Sherry B 1974 "Is Female to Male as Nature is to Culture?" (=1987 三神弘子訳「女性と男性の関係は、自然と文化の関係か？」 pp.83-117.)
- Michelle Z. Rosaldo / Louise Lamphere (ed.) 1974 Woman, Culture, and Society, Stanford: Stanford U. P. (=1987 山崎カオル監訳『男が文化で、女は自然か？—性差の文化人類学』 晶文社)
- Plumwood, Val 1993 Feminism and the Mastery of Nature, London, Routledge.
- Plumwood, Val 2002 Environmental Culture: The Ecological Crisis of Reason, London: Routledge.
- Rothschild, Joan (ed.) 1983 Machina Ex Dea, Pergamon. (=1989 綿貫礼子・加地永都子他訳『女性VSテクノロジー』 新評論)
- Ruether, Rosemary Radford 1983 Sexism and God-Talk: Towards a Feminist Theology, Boston: Beacon Press. (=1996 小檜山ルイ訳『性差別と神の語りかけ—フェミニスト神学の試み』 新教出版社)
- Ruether, Rosemary Radford 2005 Integrating Ecofeminism Globalization and World Religions, Rowman and Littlefield Publishers, Inc.
- Shiva, Vandana 1988 Staying Alive: Women, Ecology, and Survival in India, Zed Books. (=1994 熊崎実訳『生きる欲び—イデオロギーとしての近代科学批判』 築地書館)
- Shiva, Vandana 2005 Earth Democracy: Justice, Sustainability, and Peace, South End Press. (=2007 山本規雄訳『アース・デモクラシー—地球と生命の多様性に根ざした民主主義』 明石書店)
- Sturgeon, Noel 1997 Ecofeminist Natures: Race, Gender, Feminist Theory and Political Action, New York: Routledge.
- 上野千鶴子 1985 「女は世界を救えるか？」『現代思想』, 1月号, pp.80-104
- 上野千鶴子 1986 『女は世界を救えるか』 勁草書房
- Warren, Karen J. 1987 "Feminism and Ecology: Making Connections", Environmental Ethics, Vol. 9, No. 1, pp.3-20.
- Warren, Karen J. 1997 Ecofeminism: Women, Culture, Nature, Bloomington: Indiana University Press.
- Warren, Karen J. 2000 Ecofeminist Philosophy: A Western Perspective on What It Is and Why It Matters, Lanham: Rowman & Littlefield.
- Werlhof, Claudia von 1991 Mannliche Natur und Kunstliches Geschlecht: Texte zur Erkenntniskrise der Moderne, Wiener Frauenverlag. (=2003 加藤耀子・五十嵐路子訳『自然の男性化/性の人工化』 藤原書店)
- Werlhof, Claudia von 1991 Was haben die Huhner mit dem Dollar zu tun?: Frauen und Okonomie, Verlag Frauenoffensive. (=2004 伊藤明子訳『女性と経済—主婦化・農民化する世界』 日本経済評論社)
- White, Lynn, Jr. 1968 Machina Ex Deo: Essays in the Dynamism of Western Culture, Massachusetts: The MIT Press. (=1972 青木靖三訳『機械と神—生態学的危機の歴史的起源』 みすず書房)
- 『天理大学シンポジウム報告集, エコフェミニズムの可能性』 2003
- 『フェミニズムはどこへゆく—女性原理とエコロジー』 日本女性学研究会'85.5シンポジウム企画集団編, ウイメンズブックストア松香堂, 1985

(2008年9月6日 掲載決定)

## Naturalization of Women / Enculturation of Men

The Root of Domination of Women and Nature

YOKOYAMA Michifumi  
(Yokohama National University)

Ecofeminism, which is explained academically as follows: “asymmetry of gender on a natural axis”, began in the 1970s as a political movement. Ecofeminism had made observations and commentary to some degree in the 80’s. On the other hand, it had not attempted to try to grasp in cross-sectional way in various ecofeminism theories.

This paper aims to describe the systematic perception that ecofeminism consists of structural issues. As an interpretation framework, “naturalization of women / socialization of men” and following up the discussion about issue of “structural connections among the dominations of women and nature”. Especially, it explores whether ecofeminism has validity to innovate an interpretation framework “naturalization of women / enculturation of men”, when knowledge is systematized and synthesized about issues of “structural connections among the dominations of women and nature”.

First, it describes the implication and relation of the concept “culture” and “nature”, and the interpretation framework is formulated. Next, key words related to the concept of “culture” and “nature” will be extracted by using the knowledge of ecofeminism that analyzes “asymmetry of gender on a natural axis” concerning an important occurrence that happens in the West, and section based on Western History through the ages. And then this paper shows that the validity of the hypothesis model, innovated originally through the explanation of the diagram.

**Key word:** naturalization of women / enculturation of men, ecological feminism, the root of domination to women and the nature